

## ワークシヨップ「ヒバクシヤを 「語る」——核と植民地主義」報告

松永 京子

かつて小田実が『HIROSHIMA』の「あとがき」のなかで、原爆の原料となったウラニウムがアフリカのベルギー領コンゴの鉱山から採掘されたことにふれ、原爆は「そもその初めから侵略、植民地支配、差別、収奪の歴史とじかに結びついたものであった」と指摘した。実際のところ、ウラン採掘、核実験、核廃棄物処理を含んだ核兵器製造過程や原爆投下、そして原子力発電のあらゆる局面において、人種的・社会的マイノリティが搾取されてきた歴史を無視してヒバクシヤを「語る」ことは難しい。そこで本ワークショップでは、まずは二人の発表者が、具体的な核をめぐる植民地主義の形をグローバルヒバクシヤの射程から、あるいは文学表象や言葉の問題から検証した。その後、これらの発表を糸口に、ヒバクシヤを「語る」こと、あるいはヒバクシヤの「語り」について全体討論が行われた。

グローバルヒバクシヤの提唱者でもある竹峰誠一郎氏は、「聞き書き」や「参与観察」によって調査したマーシャル諸島の米核実験被害を、米公文書史料調査の結果を織り交ぜながら紹介し、

核の植民地主義の歴史を住民の記憶や「語り」に基づいた（生活史）の観点から再検討した。「核問題は死んだ（終わった）のか？」という現地の人々の問いかけに対して竹峰氏は、過小評価されてきた核被害の内実の問い直しや補償問題の再考を促すことで、被曝地の未来を見据えることの重要性を強調している。広島・長崎・マーシャル・地球規模の汚染といった個々の問題を、それだけの違いをしつかり理解するためにもまずは横に並べる必要がある、とするグローバルヒバクシヤの概念を念頭においた竹峰氏の発表は、周縁化されてきたマーシャル諸島の人々の生活に寄り添い、彼ら／彼女らの「語り」に耳を傾けることで可視化される核被害を明らかにした。フロアからは、アメリカに対するマーシャル諸島の人々の反応について質問があった。米政府に対する批判や抵抗はなかったのか、あるいは権力に寄り添って生き残っているとしたのか、等々。これらについては、ロンゲラップの女性たちの抵抗、日本と米国に対する現地の人々の対応や意識の違いなどが説明されたが、長い間複数の国によって植民地化されてきたマーシャル諸島における複雑なポリティクスと、一枚岩ではない住民の心境や見解が伺われた。

次に、本研究会会員の楠田剛士氏が、韓水山の小説『軍艦島』を取り上げ、作品における「カラス」表象を中心に、朝鮮人被爆者の強制連行、炭坑労働、原爆被爆といった問題を検証した。本発表では、題名の変遷（「陽は昇り、陽は沈む」・「カラス」・「軍艦島（邦訳）」）の説明からはじまり、作品中で言及されるカラスのイメージを網羅的に丁寧に掲げたあと、これらのイメージから派生して、「被爆死と溺死の重なり」や戦争と接続する炭坑と



差別の関連性が浮き彫りにされた。楠田氏の示した、魚とカラス、炭坑労働と原爆被爆、といった事象の繋がりは、小説中のカラスを「朝鮮人の靈魂」として位置づけ、「朝鮮人坑夫／朝鮮人被爆者の靈魂を運び出す言葉」へと結びつけるための重要なポイントでもあった。フロアからは、「核と植民地主義」という問題にこだわるならば、自分が生きてきた場所から連れ出され、原爆で殺され、放置された「朝鮮人被爆者の死者を啄む鴉」が訴えるものについて、もっと掘り下げて論じる必要があるのではないかという意見や、カラスのイメージが様々な文学作品で用いられていることから、間テクスト性の可能性もあることが指摘された。また、朝鮮人被爆者たちがカラスのイメージに重ねられているということは、朝鮮人被爆者たちが自分たちをどう「語る」のかという問題にも関わっているのではないかという鋭い指摘も聞かれた。

全体討論では、ヒバクシアと「語り」について様々な意見が交わされたが、最も印象深かったのは、どちらのケースにしても「語らない」ということにおいて共通点があるのではないか、という問いかけであった。マーシャル諸島の核被害について「語らない」アメリカ。朝鮮人被爆者について「語らない」日本。核と植民地主義の問題は、ヒバクシアが／をどう「語る」のか、という問題だけではなく、ヒバクシアがなぜ「語られなかった」のか、といった点についても深く追求する必要があるだろう。